



熊本市長

三 角 保 之

「過去を追憶して忘れ更に将来に進取するの意気精神を振作する」これは、

『熊本市史』(昭和七年刊行・平野流査編)

要しますが、膨大な量の史料を発掘しつつ、さらに、その調査・収集と並行しての執筆・編集となるとその困難さは想像に難くありません。

これまでの、編纂委員の皆様方並びに専門員の先生方、さらには史料を提供していただいた方々の御苦労及び御協力に対しまして厚くお礼

申し上げる次第です。

私は、市政を預かるに際し、「自然と歴史を活かした誇れる街づくり」を基本理念の一つに掲げましたが、実に、市史の編纂事業こそは、その理念実現への大きな柱となり得るものと確信いたしております。

「知ることは愛することの始まり」と言われ

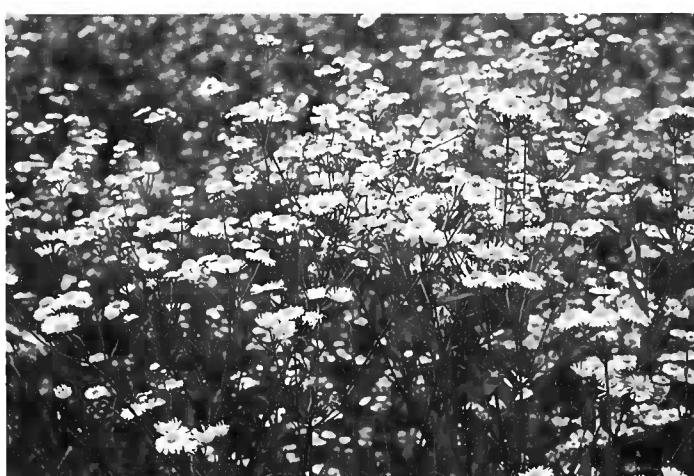
ますが、郷土への思いについても全くその通りであり、一人でも多くの方に新熊本市史を繙いていただき、ふるさと熊本への愛着をより深めていただければこれに過ぎる喜びはありません。どうか、関係各位はじめ市民の皆様の一層の御尽力と御支援を切にお願い申し上げます。

市史の編纂には、長期の時間と相当な根気をります。市史の編纂には、長期の時間と相当な根気をります。

市史の編纂に思う



編集・発行

熊本市
新熊本市史編纂
委員会熊本市手取本町1の1
市史編纂室
☎328-2038・2903

熊本市内の帰化植物

ヒメジョオン



ホティアオイ

熊本市の帰化植物の今昔

自然専門部会

浜田善利

熊本市を含む九州一円は、人類が住み着く以前、昭葉樹林と呼ばれる常緑広葉樹林に広く覆われていた。そこはシイ、カシ、ヤブツバキなどが鬱蒼と茂っている所で、ヤブツバキクラス域という植生が成立していた。弥生時代になって、この土地に水田耕作の文化がもたらされると、それと共に水田雜草が入って来た。史前帰化植物というグループである。イスビエ、オヒシバ、チカラシバ、ヒガンバナ、イヌタデ、タカサゴロウなどがその例と考えられている。

また、畑作のムギが栽培されるようになって、ツユクサ、スペリヒュ、ナズナ、カタバミ、オオバコなどの畑の雜草が生えるようになる。その土地に昔からあった種類からみると、このような変化は植物の世界の一大変革であったろう。しかし侵入して来た多くの種類は、長い間日本人と共にこの土地に定着しているので、今では日本に分布する植物と見られている。歴史が始まつてからは、異国からの植物の侵入は微々たるものであつたが、江戸時代になり僅かずつだが種類が増え、明治以後になると更に増える。だがほんとうに急増したのは、戦後経済復興に伴う海外との交流が盛んになつてからである。県内では昭和四〇年代の前半を境にして新しい帰化植物が激増している。

このような帰化植物の推移は、目の前の植物

が極めて大切である。

そこで、各種の文献によつてできる限り記録を調べてみた。そして、熊本市の帰化植物の増加の経過を丹念に追つてまとめたものは、重要な基礎資料として「市史研究くまもと」に収載されることになった。

この調査で判明した古い記録には、明治三五年（一九〇二）発行の『博物の友』に、「熊本付近の植物」としてヒメコバンソウ、マツヨイグサ、アレチノギクの名がある。

大正五年（一九一六）の『熊本県内採取植物目録』では、アレチノギクについて、「別名イヌジオウギク、ノジオウギク（熊本ニテハ明治一〇年役頃より蓄殖セル故ニ、サイゴウグサ、又ハ、センソウゲサト云フ）」との説明がある。帰化植物が歴史の生き証人となる有名な話だが、それがきちんと記録されている。

ひと頃は悪名が高かつたセイタカアワダチソウは、ヨモギやスキなどの日本古来の種類と住み分けて落ち着いている。だがオオブタクサがここ十年ばかりで各地に群生するようになつた。これは大量の花粉を風で飛散させ花粉アレルギーの大元凶として、原産地の北アメリカで最も恐れられているもの。本種は一年草で、種子ができないうちに刈り取れば絶滅できるから、熊本の土地から早く追放したい害草である。

目 次

▽市史の編纂に思う……………	どんな発達をしてきたか……………	4
▽真言律宗西大寺派末寺	長原 天福寺の所在について……………	6
▽史料調査にご協力いただいた方々……………		6
▽刊行年次計画……………		6
▽編集後記……………		9
▽薩軍の熊本城水攻め……………		9
▽日誌抄……………		10
▽史料調査にご協力いただいた方々……………		10
▽刊行年次計画……………		10
▽編集後記……………		10

小堀長順と『茗理正伝』

近世専門部会

川口恭子

昨年刊行された『新熊本市史史料編第三巻近世I』の文化の項に、熊本の茶道に関する史料として『茗理正伝』が収録された。これは今まで入手困難な、肥後古流のお茶の稽古をしていれる者でも殆んど拝見することの出来ない、いわば幻の書であった。このたび活字化され読みやすくなつたことは大変よろこばしいことである。

著者の小堀長順（一七〇〇～一七七二）は小堀家三代茂竹（長斎）の実方の妹婿村岡伊太夫（小堀流踏水術の創始者）の二男として生まれたが、十五歳で茂竹の養子となり藩の御茶道見習となつた。養父について茶道を学び、三十九歳で家督をつぎ、延享四年（一七四七）四十八歳の時御茶道頭となつた。

『茗理正伝』は宝暦七年（一七五七）に作成され、翌八年に刊行された。林菊溪の序文みると、当時千家・遠州・石州等の諸流の茶が次第にその本質をはすれてきていた現状を憂え、利休正統の茶法を伝える長順の茶書の出版を歓迎している。序文は他に道伯・長順自序、後序として秋山玉山、谷益などが寄せている。

内容は茶道に関すること二十一項目、「茶集伝来」として千利休から利休婚円乗坊宗円へ、さらに宗円婿古市宗庵へと伝えられた系図、「世伝記」として宗庵より相伝の五項目、および古市宗佐・小堀茂竹・古市三悦・小堀長順・

古市宗円へと伝承された経緯、その他が書かれている。利休はその子息道安にも伝えなかつた極真台子その他を円乗坊宗円に伝えたと書かれている。利休七哲の一人といわれ、利休の茶法をよく守つたとされる細川三斎（忠興）茶書「数寄聞書」と比較検討してみることも今後の課題の一つである。

長順は明和八年七十二歳で没したが、その前年松平不味が茶湯の隨筆「督言」を著わし、茶会におけるぜいたくを排し、茶道が治国のものとあると説いた。この頃は利休が死んで百六七年であると紹介する写真史料は、宝暦十年三月十日付で尾張国犬山藩主成瀬隼人正正泰から細川越中守重賢宛に出された書状である。重賢屋敷でお茶をご馳走になり、馬・仕舞を拝見した

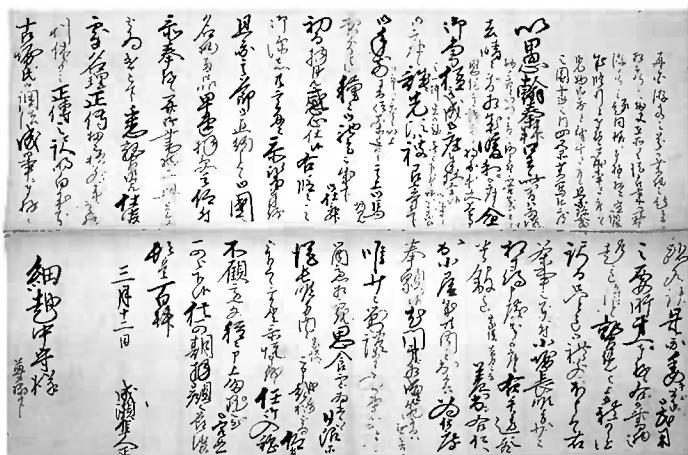
十年も過ぎたところで、利休へ還れの声があつたのであろう。「茗理正伝」はまさにその時を得て世に出された書であると考えられる。

ここに紹介する写真史料は、宝暦十年三月十日付で尾張国犬山藩主成瀬隼人正正泰から細川越中守重賢宛に出された書状である。重賢屋敷でお茶をご馳走になり、馬・仕舞を拝見した

礼を述べ、肥後国名産品と書物二冊、すなわち「茗理正伝」と「踏水訣」をもらった。「茗理正伝」を熟読したところ、格別なる書物で利休よりの正伝のわけが明白であると書き、茶事について長順に尋ねたいことがあるので家臣を遣したいこと、尤も門弟になるのではなく、対談をしたいのとよろしく頼むと書かれている。重賢は翌日付で承知したとの返事を出している。

『茗理正伝』は翌年刊行された「踏水訣」といっしょに重賢と交遊のある諸侯に寄贈された。（猿木恭経「小堀長順先生踏水訣差し上げについて」踏水会誌第十三号）成瀬隼人正もその一人であつたのである。

今まで細川藩の江戸における茶事は、遠州流の伊藤家が担当していたとの認識をもつていたが、長順は細川宣紀・宗孝・重賢と三代の藩主に仕え、藩主の参勤の都度一緒に上り下りし、諸侯との茶事の際も同席してお末を仰せつかつたりしていることから、古流の作法が通用し、それのみならず當時江戸の文化人の間で人気の高かつた宇土藩の細川興文（月翁）の引き立てなどもあり、茶博士と尊敬されて茶道について教えを乞われる状況であつたことがうかがわれる。長順関係の史料を解明することによって、肥後古流の茶についての理解が深まることを期待したい。



成瀬隼人正泰書状（小堀富夫氏蔵）

聞き取り調査

フンドーダイ株

会長 大久保圭一郎氏 談

熊本の醤油醸造は

どんな発達をしてきたか

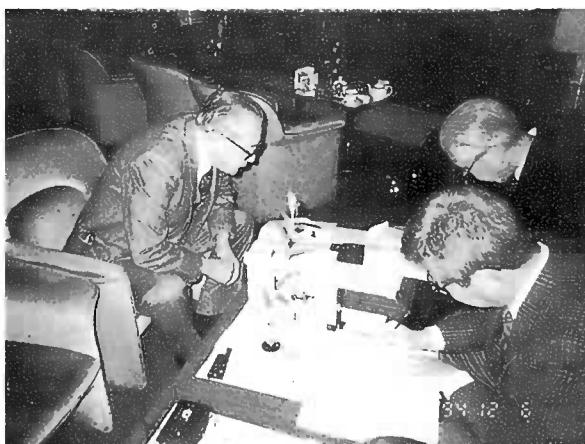
近代専門部会

花立三郎

平成六年十二月六日(火)にフンドーダイ株式会社社会長大久保圭一郎氏に、熊本市における醤油醸造の歴史についてお聞きした。それは大久保家の醤油醸造の歴史を中心にながら、熊本市における歴史にもふれるものであった。話題は工業経営・醸造技術・工場立地・流通ルート、さらに熊本鎮台・第六師団との関係等多岐にわたって話し合われたが、紙数に限りがあるので、歴史を中心に書いていくことにする。

明治一〇年七月九日に脱稿したという『熊本区史』には、当時熊本の町には、味噌醤油を當む家が三十五戸あったと記されている。その生産量は、一、五、九石であったというから大したものである。西南戦争以前に醤油醸造を営んでいた店には玉城屋、津田屋、塩津屋、加藤屋、久屋、兵庫屋等があった。そして、明治二年の記録があるが、当時上族や商家・農家でも自家製の醤油を造っていたが、そのためか熊本の醤油は品質悪く、雑菌を含んだ黒麹が多かつた。

西南戦争が一つの転機となつた。戦災によつて熊本の町は焼野原と化した。復興の第一歩と



左から 大久保会長、花立、山中専門員

して、生活必需品である醤油が大きな需要をもつて迎えられるようになつた。しかも、明治一〇年代から、近代機械化工業の先駆を成す工場手工業が急速に盛んになっていく時流に醤油工業が乗つかつていつたというべきであろう。いわんや熊本の町には熊本鎮台(後の第六師団)という大消費力をひかえていたことも幸した。

品質が粗悪であると悪評が高かつた熊本の醤油の品質を改善すべく、西南戦争の直後か、あるいは明治一五年ぐらいか、大久保彦四郎が千葉県の野田鉄子に行つて、蔵子として住み込み、彼の地の優れた技術を習得し、熊本に帰つて同業者とともに野田式の新醸造法の普及に努めた。

明治一九年には、彦四郎の弟大久保赤熊が日本西通町に久屋新店を設けて、大久保醤油は、玉城、上田、加藤、吉村、守尾などの諸家が集まって醤油温室組合を成立させた。従来の方法では、自然に熟成するのを待つてから三年の歳月を要したが、温室で醤油を醸造するようになったので、随分早くなつたのである。この方法も今は古くなつたが、当時は最新の方法で、熊本にも技術革新がおとずれたということであつた。

明治四二年二月には、重要物産組合法により熊本県醤油同業組合が設立された。初代組合長には市原秀太郎、副組合長には赤星政吉がそれぞれ選任され、第一支部長には玉城常八が就任した。当時組合員は県下で一二〇数軒に上り、そのうち熊本市には七〇数軒が数えられたのであつた。

大久保醤油では、昭和二年になつて久屋本店と久屋新店を合同して、大久保醤油株式会社を設立した。翌三年三月一〇日には製造部門を合併して、今日のフンドーダイ株式会社に至つてゐる。

以上のように大正時代を経て昭和一〇年ごろまでは醤油醸造の全盛時代が出現し、業者の中には県内資本家の優位を占める者も現れるに至つた。特に熊本のようないくつも、近代機械工業が遅れ

久屋本店と久屋新店との二店となつた。

翌二〇年には玉城の当主片山が野田を視察し、相次いで大久保赤熊が二三年野田に行き、新しい技術と経営法とを取得して帰つた。

さらには明治三〇年には、大久保赤熊が鳥取県米子の業者より、温室内醸造法の権利を買いつけること成功した。それまでは醤油醸造に三年ぐらいかつたのに、温室内醸造法を取り入れて以来、短期間に醤油ができるという、技術的にも大きな進歩が見られたのである。早速、大久保、



うべき醸造工業が有力な産業の一つとして盛況したことはいうまでもない。なかでも醤油工業が重要な部門を占めていたのである。要するに、熊本県の醤油の歴史は、全国の場合とほとんど軌を一にしており、わが国の食生活の変遷に伴い、進歩発展していったものである。

以上は、「熊本県醤油工業製造販売史」によつて、熊本市を中心とする醤油醸造の歴史を略述されたものである。大久保圭一郎氏は、このほかにも興味深い話をいろいろされた。それらを紙面の許す範囲内で、順序もなく紹介してゆくことにする。

大久保彦四郎が千葉県に行くときは、大久保家の言い伝えでは、熊本から博多までは人力車を乗り継いで行つた。博多からは船で大阪に行き、大阪から汽車で東京に上つたということである。大阪から西の方はまだ汽車がなかつた時代の話である。

醤油醸造家が熊本県下で一二〇軒ぐらいあつたうち、熊本市が七〇数軒と圧倒的に多いのは、醬油が生活必需品であるだけに、その消費地に立地したことである。野田の醬油は江戸では控えていたのであり、兵庫県・香川県に盛んなも大阪市場を控えていたからである。九州では醬油の醸造工数は福岡県が第一で、熊本県ではその半分である。これは昭和二年の資料だが、福岡県が人口が多いためであり、したがって消費量も多かつたのである。

熊本市における醤油醸造家の場所をみると一つの特色がある。以前は原料の大豆と小麦は地中元産を使っていた。郡部から原料を仕入れるので、醤油醸造家は多く町の出口にあった。鹿本郡に近い出町、京町とか、菊池郡に近い千反押、御船町とか、下益城郡や御船などに近い御船町、すなわち、迎町、本荘町とかに多かつたわけである。

熊本の醬油も、昭和になると県外に出荷さわ

の卸屋が醤油の卸屋も兼ねていたのである。江戸では逆で、醤油の卸屋が酒の卸屋を兼ねていた。だいたい酒と醤油は同じ流通ルートを通った。このルートは昭和四〇年ぐらいまでつづいた。四〇年以後は、酒問屋でなく、食料品問屋を通じて、小売店およびスーパー・マーケットに流出するようになった。出荷の対象は、広島、山口、九州全域、沖縄、台湾であった。台湾はとくに熊本県醤油のマーケットだった。

昭和二、三年ごろ、大久保醤油株式会社をつくったときから台湾にどんどん出すようになった。そして、そのほかの熊本県のメーカーも出すようになった。その点で、熊本県は醤油の輸出県である。お隣の福岡県は逆に醤油の輸入県である。福岡県は醸造高も多かつたが、大消費地でもあった。それで福岡県から熊本県に醤油が入ってくることはほとんどなかつた。

熊本鎮台や六師團に納めるのが非常に多かつた。明治時代は鎮台と六師團に納める量が、だいぶ減つて居た。義理で行方不明になつた。

になると県外に出荷され
るようになった。昭和二
年、久屋本店と久屋新店
が合併して大久保醤油株
式会社と成るところになる
と、市内の有力業者が相
次いで県外に出荷するよ
うになつた。とくに県外
出荷が多かつたのは、大
久保醤油株式会社、それ
から玉城、上田、すなわ
ちミズヨシ醤油上田であ
る。それにマルコメ醤油
加藤があつた。県外に出
荷する場合、出荷の目印
は酒の鉢屋であつた。酒

で納めた。軍の糧秣廠に納めると、原料の配給も優先的であった。

「フンドーダイ」の由来は、「フンドー」は分銅、目方をはかるときの金属のおもりであるが、「ダイ」は大久保の「大」である。本店・支店の久屋が合併して、昭和二年に大久保醤油株式会社を作ったとき、この登録商標として持つていたものを使うことにしたのである。

以上は、大久保圭一郎氏の談話を書きとめたものである。紙数制限のため尽さないところがあるが、文責は記録者にある。

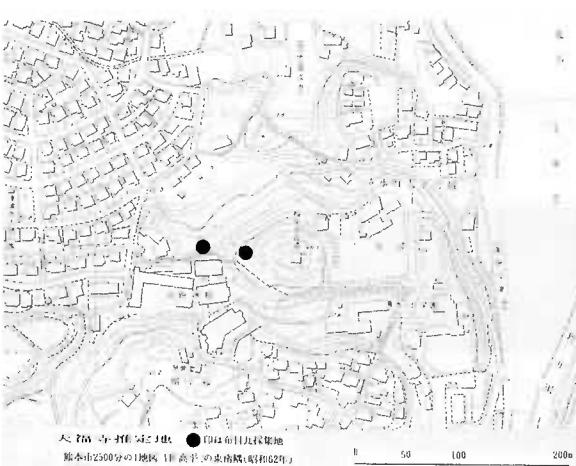
史料中世編 第五)がある。(角川地名大辞典
熊本県の長浦村(熊本市)「中世」)

天福寺がいつ開かれたかは不明であるが、「西
大寺光明真言結縁過去帳」(西大寺関係史料(2))
によると天福寺の僧として宝密房(三五六~三七〇)、
良一房(三五九~三五五)、慈一房(四二九~四三三)の名
が()のなかの年代に見えるから、この史料から
は真言律宗の寺院としては貞治五年(三七〇)以前
から応永三〇年(四二三)以後ということができる。
荻野三七彦早稲田大学名誉教授が収集された
「肥後国山鹿某寺仏像胎内納入文書」(歴史手帖
五一二)に浄光寺・天福寺・春日寺と西大寺の末
寺の名が見えるところから熊本大学工藤敬一教
授は山鹿の某寺というは同じ西大寺系の金剛
光明寺としたが(工藤敬一「山鹿市史」)、その後
京都善峰寺であることが判明した(工藤敬一「京
都善峰寺仁王像胎内納入文書について」「早稲田
大学蔵資料影印叢書」第十五卷月報)。経緯は康
暦元年(三七〇)に光明真言が書き上げられ、その
後長福寺(三条大宮寺)の仁王像胎内に納入され
たのではないか。永禄八年(三五五)以前に長福寺
が廃寺となつたので善峰寺に移された。昭和三十
年頃この仁王像が修理され胎内納入品が発見
され、修理の過程で一部が流れ荻野氏が収集し
たのであるという(中世民衆寺院の研究)。

元興寺文化財研究所

この文書のなかで天福寺関係記事は浄光寺淨
譽から天福寺聖(正)實に宛てた書状(四七二)など
聖實宛が五通あり、天福寺が去々年立つたのに
今年焼けたことを報告している浄光寺某から聖
實への書状(四七三)があつて、「打越イボ宮」に残
る焼けた木像はこのときのものであるかもしけ
ない。聖実房は真言律宗長福寺の僧で、応永の
ころ京都と肥後を往復していた。

また、曉惠書状(四八五)には「又長浦の式にも」



という文言が入っている。この胎内文書は書状
などの裏紙を利用して阿弥陀如来や十一面觀音
の仏印を一杯並べて押してあるもので、元の文
書は断簡となつていて、この文書の意味も
よくは分らないが、都より下向される御房を
迎えるときの書状のようであり、この「長浦」は
天福寺のある長浦である可能性が高い。とすれば「長原」は長浦の誤記ではあるまいか。

網野善彦は真言律宗の寺はとくに海上交通の
要地が選ばれたことを指摘し(蒙古襲来、吉井
敏幸は蒙古襲来を機に勅宣によつて諸国に広ま
り、その後も在地領主の菩提寺として繁栄した
(九州における西大寺流の地方伝播)と述べて
いるが、ここも説磨氏の外護があつたのであろう。

本稿にあたつて工藤敬一・鈴木喬・森下功諸氏の
ご教示を得た。

近代史料調査(水青文庫)

現代史料調査(提出原稿の検討)

新熊本史市編纂委員会視察研修(国立国
会図書館江戸東京博物館)

近世史料調査(史料編「近世II」にかか
る収集史料検索)

民俗・文化財聞き取り調査(山迎の人生
儀礼・祭り・行事等)

現代史料調査(凸版印刷と打合せ)
第二十八回原始・古代専門部会(史料編
「考古資料」原稿執筆の進捗状況について)

現代史料調査(凸版印刷と打合せ)
編さんだより掲載写真の撮影

民俗・文化財聞き取り調査(城山・高橋
地区の人生儀礼・祭り・行事等)

第三十四回中世専門部会(通史編「中世」
編集項目について)

現代出張調査(甲府市、東京都立中央圖
書館、日本航空協会等)

民俗・文化財史料調査(聞き取り調査報
告、原稿執筆について)

近世史料調査(史料編「近世II」にかか
る史料検索)

第三十七回近代専門部会(史料編の編集
について、永青文庫の今後の調査につい
て)

現代史料撮影(熊本空港)

原始・古代史料調査(県立第二高校所蔵
牧崎出土の甕棺調査)

原始・古代史料調査(史料編「考古資料」
の執筆に伴う歴史時代担当者打合せ)

現代史料調査(史料編「現代」三編の原
稿調整)

石造物(金石等)調査

柳川市総務部庶務課市史編さん係来室
近代史料調査(大慈禪寺史料収集のため
の検索)

東京大学史料編纂所黒川高明教授來室
近代史料撮影(熊本県統計書)

第二十九回原始・古代専門部会(平成七
年度事業計画について、史料編「考古資
料」の仕様及び構成について)

薩軍の熊本城水攻め

—古写真からみた状況—

原始・古代専門部会

富田紘一

西南戦争時の熊本城攻防戦の末期において、その最高部薩軍が熊本城を水攻めにしたのは有名な話である。この水攻めの状況を撮影した貴重な古写真が現在四枚ほど知られている。この画像には、巨大な湖と化した井芹川流域の低地が生々しく写し出されている。

その湖水化した部分を地図に落とし、その水面の標高と広がりを探り、またその水深を考察してみた。比較のためには熊本市が大正元年に発行した『熊本市及附近實測圖』を用い、標高は昭和五〇年測量の地図によった。

図示したのは写真の一枚で、花岡山の山頂付近から撮影したものである。

写真右手前の陸地は横手原とよばれる小台地で、右下隅あたりで標高三〇メートル地点がある。北側に集落が見える。そのほか中央に寺院らしい建物があり、正念寺であろうとみられ、水面すれすれに位置している。寺の北側の水面下に没した地点に標高九、五メートルがある。岬状にのびる水際のやや上位に道路が見え、その路面を現況で十二メートル等高線が通る。

右側の中段に突きだした半島状の部分が、藤崎から段山である。その先には、湖水化した中杉塘の杉樹列が認められる。杉塘電停あたりで標高九メートル程である。

左側では、四方池原からのがた台地の突端がみえ、標高一〇メートルあまり。その先に小さ



花岡山より見た井芹川流域の水没地

く浮島ように見えるのが遠矢塚で、その最高部は標高十五メートル。その先にまた小さく飛び出した部分は琵琶崎で、現在の聖母待労病院敷地の東端にあたる。湖水化した奥は牧崎の丘陵から井芹である。湖水化した奥は牧崎の丘陵から井芹である。

以上の観察から、湖水面の標高を推測してみたい。この中で、最も高さを知る手がかりになるのが、横手原を巡る道路の標高である。道路舗装などもあり、若干嵩上げになつていて思われるが、写真では路面より低くて水面となる。また、この北側では九、五メートルが水中に没した地点があつた。これより推測して、湖水化した水面の標高は十メートル強と思われる。

11 11	11 11	11	11	11 11	11 11	10 10	10	10	10	10	10	10	10
.
18 17	16 15	15	14	9	8	31 31	31	26	22	21	18	15	15
.
16				12	1	11	11	11	25	21	16	15	15
				13	3	11	11	11					

く浮島ように見えるのが遠矢塚で、その最高部は標高十五メートル。その先にまた小さく飛び出した部分は琵琶崎で、現在の聖母待労病院敷地の東端にあたる。湖水化した奥は牧崎の丘陵から井芹である。

以上の観察から、湖水面の標高を推測してみたい。この中で、最も高さを知る手がかりになるのが、横手原を巡る道路の標高である。道路舗装などもあり、若干嵩上げになつていて思われるが、写真では路面より低くて水面となる。また、この北側では九、五メートルが水中に没した地点があつた。これより推測して、湖水化した水面の標高は十メートル強と思われる。

原始・古代史料調査（史料編「近世II」収載史料調整）	近代史料調査（通史編・史料編の章立て検討）
民俗・文化財史料調査（調査報告及び項目調整について）	民俗・文化財史料調査（調査報告及び項目調整について）
近世史料保存利用機関連絡協議会第二十回全国大会出席（横浜市）	近世史料保存利用機関連絡協議会第二十回全国大会出席（横浜市）
第三十八回近代専門部会（通史編・史料編の章立て検討）	第三十八回近代専門部会（通史編・史料編の章立て検討）
中世史料調査（通史編「中世」編集項目及び調査）	中世史料調査（通史編「中世」編集項目及び調査）
近代史料調査（河尻神宮史料収集のための検索）	近代史料調査（河尻神宮史料収集のための検索）
中世出張調査（日本古文書学会への参加及び調査）	中世出張調査（日本古文書学会への参加及び調査）
第三十二回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の構成について）	第三十二回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の構成について）
近世史料調査（史料編「近世」四編校正について）	近世史料調査（史料編「近世」四編校正について）
原始・古代史料調査（史料編「考古資料」の執筆に伴う歴史時代担当者打合せ）	原始・古代史料調査（史料編「考古資料」の執筆に伴う歴史時代担当者打合せ）
民俗史料調査（近世史料立歴史博物館、安田家）	民俗史料調査（近世史料立歴史博物館、安田家）
近世出張調査（貫家、江戸東京博物館）	近世出張調査（貫家、江戸東京博物館）
第三十二回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の構成について）	第三十二回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の構成について）
近世史料調査（史料編「近世II」収載予定史料の検索）	近世史料調査（史料編「近世II」収載予定史料の検索）
第三十九回近代専門部会（史料編「近代I」の編集範囲について、通史編「近代II」の担当決めについて）	第三十九回近代専門部会（史料編「近代I」の編集範囲について、通史編「近代II」の担当決めについて）
第三十一回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の地図作図方法について）	第三十一回原始・古代専門部会（史料編「考古資料」の地図作図方法について）
近世出張調査（清水家文書の調査・収集）	近世出張調査（清水家文書の調査・収集）
現代史料調査（史料編「現代」に掲載の写真調査・選択、校正刷りの検討・調整）	現代史料調査（史料編「現代」に掲載の写真調査・選択、校正刷りの検討・調整）
中世史料調査（荘園推定について）	中世史料調査（荘園推定について）
原始・古代史料調査（史料編「考古資料」の執筆に伴う歴史時代担当者打合せ）	原始・古代史料調査（史料編「考古資料」の執筆に伴う歴史時代担当者打合せ）



湖水下になつた部分の標高では、遠矢塚の東側で一番低く八、一メートル。井芹川に沿つて八、五メートルから九メートルが続く。これらの部分は宅地や道路となつており、当时より数十センチは嵩上げしていると考えられる。そこで水深は、最も深い部分で二メートル程度であつたろうと考えられる。

写真で観察できる湖水化した部分は旧城下外のみである。ちなみに城下町(昔の町名を使用)では、段山町が九、六メートルと最も低く、高麗門町・上職人町・小沢町十メートル代、新町か

ら古町の大部分は十一メートル代である。横手の寺院では長国寺・禅定寺・妙永寺が九メートル代後半である。

これをみると、段山町の一部を除いてほとんどの町内の浸水はないらしい。また横手の寺院では、浸水の可能性が高いが、最大でも三~四センチ程度であつたろう。これよりみると井芹川の下流域であるにもかかわらず、この一帯の浸水は少ない。恐らく、西南戦争時に浸水した地域は本来一段下がった場所で、それは断崖など地質的要因によるものではないだろうか。

近代史料調査（平野家文書）
民俗・文化財聞き取り調査（商家の生活と社会について）

近代史料撮影（永青文庫）

第十九回民俗・文化財専門部会（通史編「自然・原始・古代」の原稿執筆進捗状況について）

近世史料調査（史料編「近世II」の編集項目の素案）

第十九回民俗・文化財専門部会（別編「民俗・文化財」の掲載率・真偽検討）

近世史料調査（永青文庫近代史料の読込み・編成素案作業）

原始・古代、民俗・文化財部会間調整（金石の取扱いについて）

中世史料調査（中世城・館跡調査）

近世史料調査（史料編「近世II」編集項目についての史料検索及び素案作成作業）

近代史料撮影（警察閲文書）

第三十二回調査（大久保家）

考古資料一概説執筆（専門部会の要領について）

民俗・文化財史料調査（調査報告及び使用写真検討について）

近代史料調査（市政史料の収集についての打合せ）

近代史料調査（植物分野担当者打合せ）

第三十三回近世専門部会（史料編「現代」校正状況及び通史編について）

中世史料調査（圧縮推定について）

近代史料調査（刊行年次計画の変更について、上半期各専門部会報告について）

近世史料調査（史料編「近世II」収載史料検索）

第四十回近代専門部会（史料編「近代I」の構成について、史料調査について）

第三十四回民俗・文化財専門部会（別編「民俗・文化財」掲載写真及び調査史料について）

刊行年次計画

第15回編纂委員会において刊行年次が下記のとおりに変更されました。全21巻22冊

区分	発刊年度
通史編	第1巻 自然・原始・古代 9
	第2巻 中世 9
	第3巻 近世I 10
	第4巻 近世II 12
	第5巻 近代I 9
	第6巻 近代II 12
	第7巻 近代III 14
	第8巻 現代I 8
	第9巻 現代II 10
史料編	第1巻 考古資料 7
	第2巻 古代・中世 発売中
	第3巻 近世I 発売中
	第4巻 近世II 7
	第5巻 近世III 9
	第6巻 近代I 8
	第7巻 近代II 11
	第8巻 現代 6 ※
	第9巻 新聞上近代 発売中
別編	第9巻 新聞下現代 発売中
	第1巻 絵図・地図 発売中
	第2巻 民俗・文化財 7
別編	第3巻 年表・索引 14

既刊

※近日発売予定

好評 発売中

市内主要書店でお求めください。

史料編(各3,700円消費税込)

第二巻 古代・中世

第三巻 近世I

第九巻 新聞上近代

〃 新聞下現代

別編(10,300円消費税込)

第一巻 絵図・地図(二分冊)



熊本市内の帰化植物 オオイヌノフグリ

編集後記

樋山聖孝(東海大学)、貫達人(鎌倉市)、井上怜(五和町)、岩崎彰代志(湖東二子町)、甲斐恒喜(二本木三丁目)、吉本明(龍田町)、大久保圭一郎(稗田町)、林田正敏(城山上代町)、県立第三高校、県立東稜高校、県立済々賀高校、内藤記念くすり博物館、石塘堰植土地改良区、神戸市教育委員会文化財課、熊本大学附属図書館、徳富蘇峰記念館(神奈川)、蘇峰会山王草堂記念館、大慈寺、清水宇藏商店、河原神宮、県立図書館、玉名市市史編纂室、県立大学附属図書館、野田市兵衛商店、県立大学総務課、九州女学院短期大学、熊本空港、交通博物館、通信博物館、航空図書館、明鉱苑、熊本ファミリー銀行、市立図書館、市消防局、市財政課、市秘書課、市議会事務局、北部総合支所、市体育保健課

史料調査に
ご協力いただいた方々
(平成6年七月
至十二月)

▼阪神大震災を機に地震への不安、関心が高まっています。
▼十三世紀のトマス・アクィナスは、「われ在り、ゆえに、われ思う」と言い、それを、十七世紀にデカルトが、「われ思う、ゆえに、われ在り」とひっくり返したそうです。
「思考を技術の一種と見ると、世界存在より人間の技術が先行すると考えたわけで、このあたりから地球環境が技術によってめぢやめぢやになつてくる」と作家堀山善衛氏は言っています。
文明の発達と、人間の幸福は比例すると信じてきた私達ですが、自然界と遊離した生活ほど、人の感じる幸福感は淡いような気がします。
今号は、第10号を記念して、部カラーにしました。
掲載の帰化植物の写真は、いずれも浜田善利先生の撮影です。